



1章 明石のめざす景観

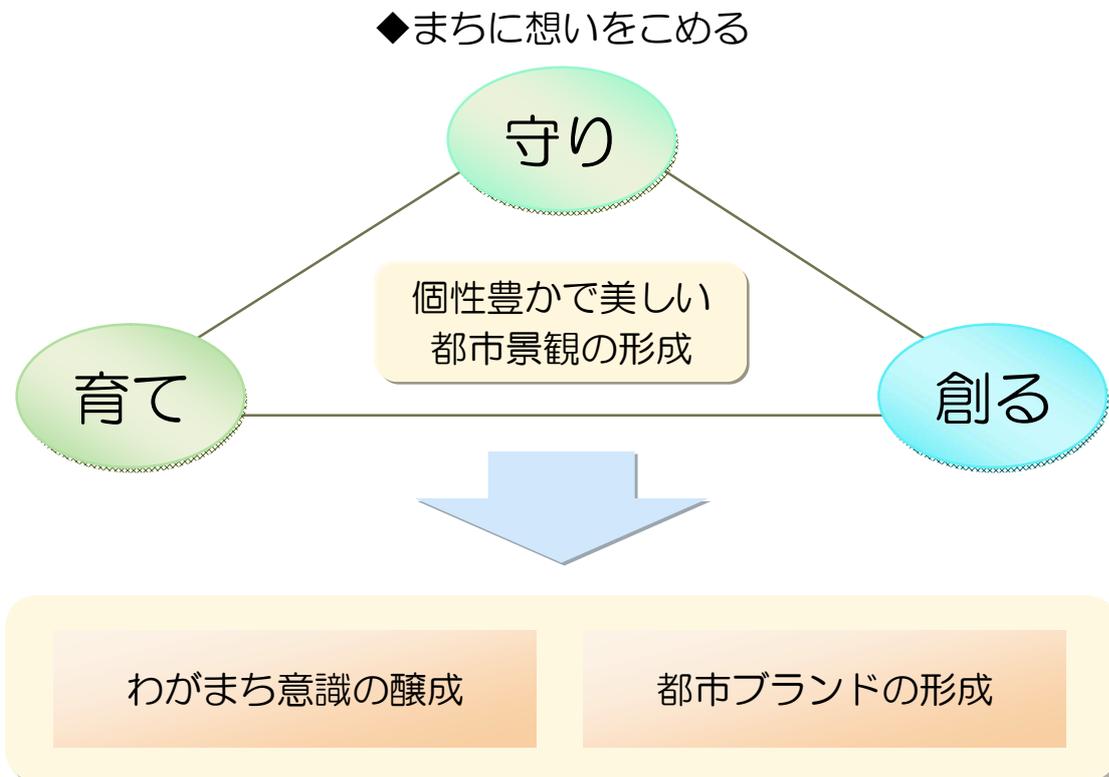
1. 景観まちづくりの理念

個性豊かで美しい都市景観を、 守り、育て、創る景観形成

恵まれた自然や豊かな歴史といった明石固有の景観資源は、明石らしい個性豊かで美しい都市景観を形成するために重要な役割を果たしています。

市民・事業者・行政が一体となり、景観資源を「守り」、「育て」、「創る」ことが、快適な環境を創造し、市民一人ひとりのわがまち意識の醸成と魅力ある都市ブランドの形成につながります。

本計画では、個性豊かで美しい都市景観を形成するため、「守り、育て、創る景観形成」を景観まちづくりの理念とし景観形成に取り組みます。



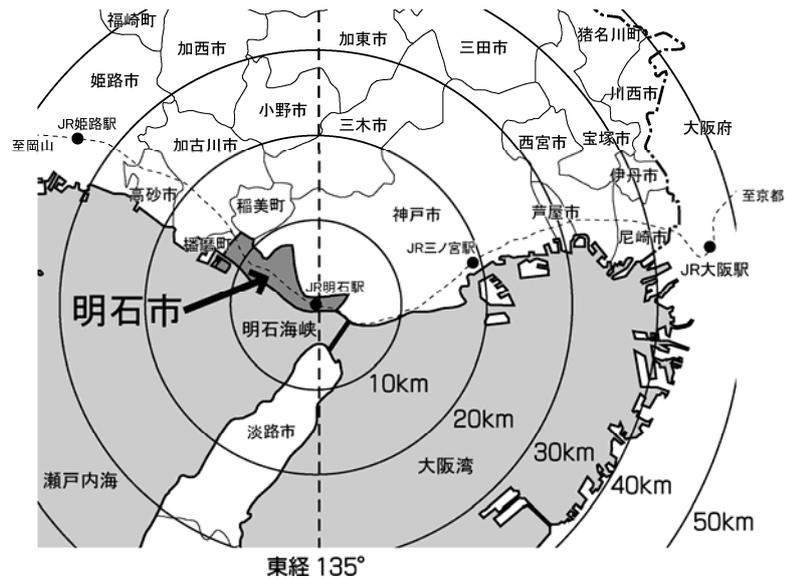
2. 明石の景観

(1) 明石の景観の背景

明石の景観を理解し、自然や歴史に培われた地域の特性や、そこから導きだされる景観形成の方向性を探るため、地形や歴史など景観が形成された背景を見ていきます。

●位置

明石市は東経 135 度、日本標準時子午線上にあり、兵庫県の中南部、阪神都市圏と播磨都市圏が接するところに位置しています。東及び北は神戸市に、西は加古川市、播磨町、稲美町に接し、南は瀬戸内海と接し、対岸には淡路島があります。



●気候

明石の気候は、最高気温が 33℃～35℃、最低気温が零下 6℃～4℃で、年間平均気温は 14℃～15℃と温暖であり、晴天が多く年間降水量も 1,000 mm程度と比較的少なく、清らかな空気と明るい太陽に恵まれた快適な自然条件を有しています。

●地勢

明石は、東西 15.6km、南北 9.4km、(市域面積は 49.25km²) と東西に細長い市域で、東播台地の東端に位置し、山地のない、瀬戸内海に面した東西に長い海岸線と、ゆるやかな丘陵地を背後に有する平坦な土地が、明石の地形の特徴です。

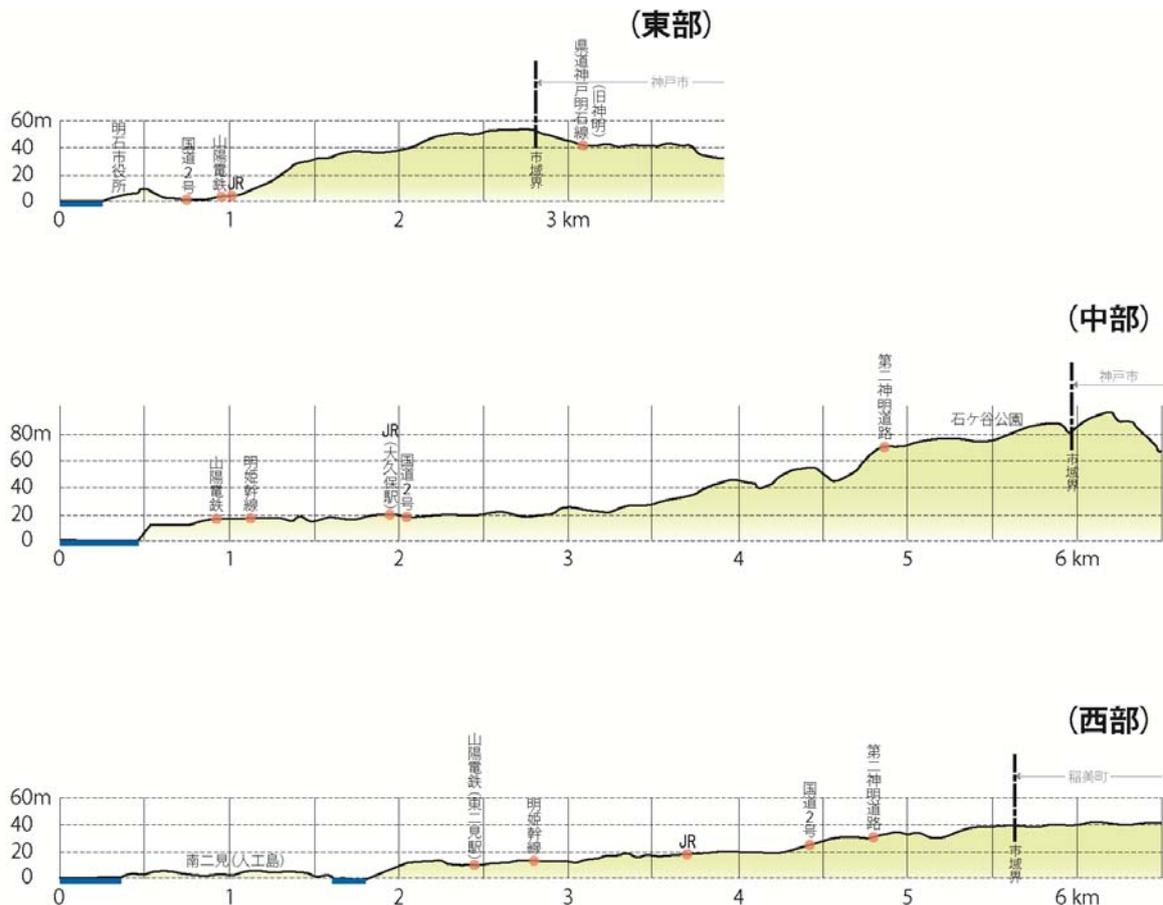


明石の海岸線は、古くは白砂青松[※]の地として詩歌にもうたわれ、海水浴場などレクリエーションの場として広く市民に親しまれてきました。しかし、明石海峡を流れる急潮や河川からの土砂供給が減少したことなどにより海岸が浸食されたため、全域に護岸工事と養浜事業が施され、新たに砂浜が創出されました。現在では「海峡交流都市・明石」のシンボル空間となっています。

河川については規模は小さく、明石川、朝霧川、谷八木川など、いずれも流域が短く、川幅も狭いことが特徴です。

また、古くから田園が広がり、大きな河川がないことや気候が温暖で少雨であることから、かんがい用ため池が多く点在し、市街化の進んだ現在でも中西部に広がる田園地帯とため池群は、全国でも稀な景観を創りだしています。

■ 明石の都市空間構成

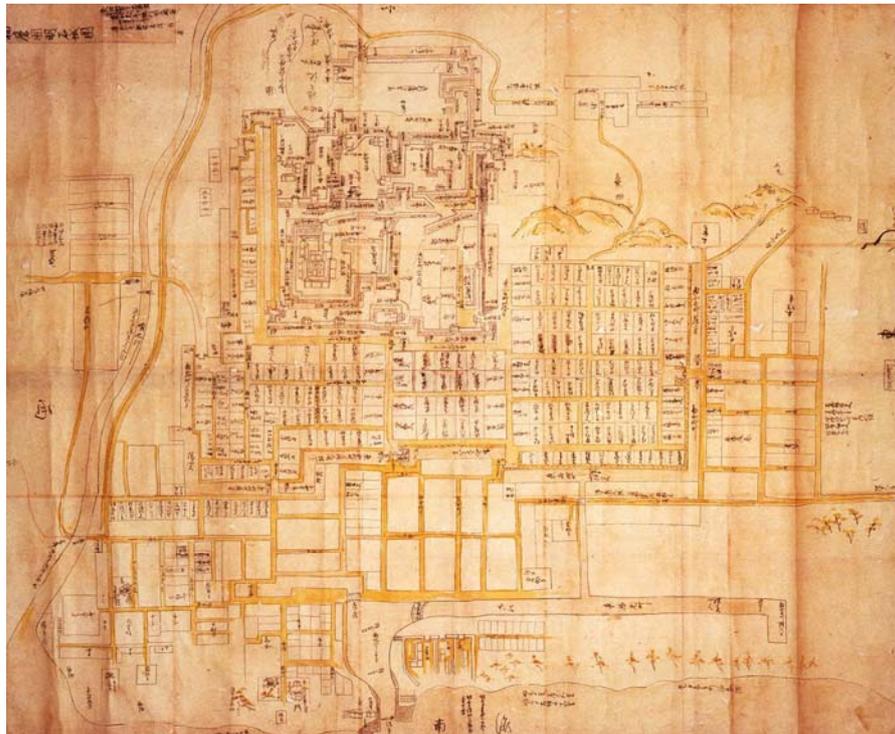


※印の言葉は、巻末の「語句説明」に解説があります。

●歴史

明石の市街地は、古く中世から近世にかけ、摂津と播磨の国をつなぐ交通の要衝の地として栄えました。西国街道や浜街道がまちの中心を通り、政治上、軍事上及び経済上の拠点となり、徐々に町が形成され、明石川右岸の船上地区を中心に発展してきました。

江戸時代に入ると、小笠原忠真が明石城を築いたことで、本格的な城下町の建設が行われ、町の中心が船上地区から現在の城跡周辺に移りました。町割り※は、城を中心に武家屋敷と町家を主体として構成されており、現在の中心市街地の原形となっています。西国街道や浜街道沿いには、今も昔の面影を残す町家や酒蔵が点在し、歴史的景観を創出しています。



播州明石城図（大久保時代 1639～1649）

近代に入ると、城下町は明治維新の変革に伴い、明治 22（1889）年に町制がしかれ明石町となり、大正 8（1919）年に明石市が誕生しました。

この間、明治 19（1886）年に勅令「本初子午線経度計算方及標準時ノ件」が發布されたことにより、東経 135 度の子午線通過地・明石は、日本標準時のまちとなりました。

市街地は、城下町時代の町家、武家屋敷の一角が官公庁、商店街、業務街へと変貌し、一般市街地は東西に外延的に拡大しました。

※印の言葉は、巻末の「語句説明」に解説があります。



市制施行後、昭和 17（1942）年に林崎村を合併し、その後戦災により市の中枢部の大部分を焼失しましたが、戦後、復興を成し遂げ、昭和 26（1951）年には、大久保町、魚住村、二見町を合併し、播磨平野の豊かな農業地帯が市域に含まれました。

昭和 30 年代後半の高度経済成長期に入ると播磨臨海地域が工業整備特別地域として指定されたこともあり、国道 2 号沿いを中心に大企業が進出し、昭和 50（1975）年には二見臨海工業団地が造成され、県下有数の工業都市として発展してきました。

昭和 40 年代に入ると、大規模団地やマンションの開発により、関西圏の衛星都市・住宅都市として都市化が進展しました。



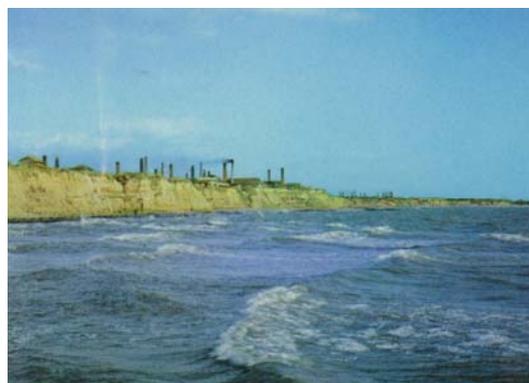
子午線道標



昭和 36(1961)年 桜町付近



昭和 39(1964)年 明舞団地



昭和 41(1966)年 八木海岸

(2) 明石らしい景観

明石の魅力の再発見を目的に、すばらしい景観を市民の皆さんに募集し、選定した「わがまちあかし景観 50 選」から、どのような景観が代表的な明石の景観で、明石らしい景観なのか考えます。

◆代表的な明石の景観(わがまちあかし景観 50 選より抜粋)

12 野々池

11 岬町の漁港

10 織田家長屋門

9 明石港と周辺

15 洋館と御小休所

13 林崎～松江海岸

16 八木遺跡公園

14 石ヶ谷公園

17 太陽酒蔵

19 住吉公園

18 江井ヶ嶋酒蔵

22 二見港と周辺

21 二見港と周辺

20 茨木酒蔵



7 明石公園

2 大蔵のまちなみ

4 天文科学館

5 天文科学館からの眺望

6 中崎公会堂

8 魚の棚

3 大蔵海岸

9 明石港と周辺

9 明石港と周辺

1 明石海峡大橋 (大蔵海岸からの眺望)

明石の魅力といえば、「わがまちあかし景観 50 選」で最も多くの市民から支持された、美しい海岸線とそこから望む明石海峡です。淡路島を背景にした明石海峡と海岸線は、古くから風光明媚な地として、行き交う人の心を捉えてきました。白い砂浜と広がる雄大な海は、季節や時間の変化の中で様々な表情を見せてくれます。

平成 10（1998）年の明石海峡大橋開通による、海岸の自然美と大橋の人工美が調和した新たな景観は、明石の景観の代表といえます。

次に、明石は「魚のまち」として、さまざまな風景・風物詩を演出しています。明石海峡は、優良な漁場であることから、古くから漁業が盛んに行われ、明石を「魚の町」として成長させました。魚の棚商店街の活気ある風景や屋網のせりの様子、漁港の船溜り、干しダコの風景は、「魚のまち」明石を物語るものです。

また、明石は、東経 135 度日本標準時子午線が通る「時のまち」でもあります。その象徴である天文科学館は、昭和 35（1960）年の開館以来、多くの人に親しまれてきました。列車や車から天文科学館を見たとき、明石に着いた、明石に帰ってきたと感じる人は多いのではないかと思います。

他にも、城下町明石の名残をとどめる明石城跡や織田家長屋門、西国街道や浜街道沿いのまちなみ、東の灘に対して西灘と並び称される酒所明石を象徴する酒蔵などは、「歴史のまち」の一面もうかがわせてくれます。

以上のように「明石らしい景観」とは、地形や歴史など、明石の地域特性から創出されたものであることが分かります。



大蔵海岸からの眺望



屋網のせりの様子



天文科学館



織田家長屋門



3. 明石の景観を構成する4つの景観

「2. 明石の景観」から、明石の景観は、海岸線や田園・ため池などから形成される「自然景観」、歴史的まちなみや歴史的建造物から形成される「歴史景観」、住宅地、商業地、工業地などから形成される「市街地景観」により構成されていることがわかります。また、それぞれの景観の中にある地域の生活を反映した身近な景観、「生活景観」を加えると、明石の景観は4つの景観で構成されています。

●自然景観

明石には、大阪湾から播磨灘にかけて残された数少ない砂浜を持つ海岸線、中西部に広がる田園やその中に点在するため池、明石川や谷八木川などの河川、金ヶ崎公園の緑地など、明石固有の地形・風土・気候から生まれた自然景観が多く存在し、明石固有の景観を創っています。

●歴史景観

明石には、明石城跡や織田家長屋門、西国街道、浜街道沿いの古くからのまちなみ、酒所明石を象徴する酒蔵、中崎公会堂や住吉神社など、古くからの建造物が残されています。これらは、時間の経過と共に移り変わってきた過程を今に伝え、地域の個性を表現した象徴的な空間を創っています。

●市街地景観

明石には、松が丘や太寺、高丘などの住宅地、明石駅周辺に代表される商業地、西明石や二見に見られる工業地など、人の生活にもっとも深く関わる様々な市街地の景観があります。このような市街地景観は、まちへの愛着を育み、まちづくりの原動力となります。

●生活景観

明石には、住宅地にある趣のある小径やそこにたたずむ^{ほころ}祠^ひや碑など、暮らしに溶け込んだ明石ならではの景観が存在します。このような身近な生活景観は、普段は見過ごされがちですが、離れてみてその良さに気がつくように、まちづくりの原点となる大切なものです。

4.景観まちづくりの目標

明石らしい個性豊かで美しい都市景観を形成するためには、豊かな自然や残された歴史的資産を生かし、市民、事業者、行政が一体となり、積極的に景観まちづくりに取り組む必要があります。

そのためには、めざすべき方向を明確にする必要があるため、次の4つを景観まちづくりの目標として掲げます。

◆景観まちづくりの目標

① 自然にやさしい景観形成

② 歴史をつなぐ景観形成

③ 市街地がうるおう景観形成

④ 生活に溶け込む景観形成



① 自然にやさしい景観形成

明石固有の地形、気候が育んだ自然景観は、明石の個性を創る上で重要な役割を演じます。そして、建築物、道路など人工的な施設に取り囲まれた都市空間の中で、自然はうるおいとやすらぎをもたらす貴重な存在です。また、長い時間をかけ育てられたものであり、人の手で容易に創ることができないものです。

そこで、自然を守り、自然と調和し、自然を生かす「自然にやさしい景観形成」を目標にします。



② 歴史をつなぐ景観形成

歴史や伝統を伝える建築物、まちなみなどが創る歴史景観は、まちの歴史を今に伝え、未来につなぐものです。また、長い時間を経て残されたものであることから、地域の個性を表現するとともに、景観の核ともなります。

そこで、歴史的な資源や趣を大切に保全・活用する「歴史をつなぐ景観形成」を目標にします。



③ 市街地がうるおう景観形成

暮らし、働き、楽しむなど生活の場である市街地景観は、うるおいのある美しい景観を形成することで、人に快適さを与えることができます。また、そのような景観を創造することで、まちを活性化することにもつながります。

そこで、緑豊かにするなど快適性を重視した市街地を創造する「市街地がうるおう景観形成」を目標にします。



④ 生活に溶け込む景観形成

まちの特性や住民のまちへの思いがあらわれた生活景観は、その良さに気がつきにくいものですが、わがまち意識を醸成するためには欠かせない要素です。

そこで、市民一人ひとりが身近な生活景観を意識し、保全・育成する「生活に溶け込む景観形成」を目標にします。

